

# 年 賀 状 の 研 究

丸 山 和 香 子 三 井 昭 子  
遠 藤 織 枝 小 林 美 恵 子

この「年賀状の研究」は、(財)ベターホーム協会より「生活文化に関する研究」の為に設けられた研究助成金(1985年度)を受けてなされたものである。

毎年、年末・年始にかけて、膨大な数の年賀状が日本中を飛び交い、日本人の年中行事の一つ、正月のイメージを強く表すものとなっている。最近では、前年の11月ごろ、郵政省で売り出す年賀はがきは30億枚をこえ、それ以外の私製の年賀用はがきを加えると更に多くの年賀状が、この時期に集中している。この郵便物の受けつけ、配送・配達には郵政省も特別な体制をとって応じているが、年初に相手方に年賀状が届くよう準備する個々の差出人の手間ひま・費用も大きなものであろう。このような点からか、毎年、年賀状を準備するころになると、「年賀状は虚礼だから廃止しよう」とか、「義理で出す年賀状は意味ないからやめよう」「自分はこう考えて年賀状を出すことをやめた」などという意見や見解が、あらわれる。このような年賀状虚礼説や、年賀状廃止説は、今日このごろに始まったことではなく、年始状の特別扱いを始めた明治末年から、新聞紙上を賑わしていた。ちなみに、当時の年始状は4,500万枚位であったという。

その後、80年近く経た今日まで、大きな戦争の前後、政情の変化、郵便料金の値上げの前後などには、年賀状の枚数にも、年賀状にしるされる文章にも変動があった。だが、大きな流れとしては、年々増え続け、ついに1986年11月には郵政省発売の年賀はがきだけでも32億枚となったのである。

この膨大な枚数の年賀状を支えている人々は、年賀状をどのように考えているのか、又自分の考えを年賀状にどのように反映させているのか、又、受けとった年賀状に見られる特徴にはどのようなものがみられるか、など、今回の研究を通して明らかにしようと試みた。

## 研究計画の概略

この研究は、二つの調査を軸として立案された。それを「調査A」と「調査B」とする。

「調査A」は、「年賀状に関する考え方や実情を知り、生活文化との関連をとらえる資料を求めること」が目的であり、1985年11月下旬から、12月初旬にかけて行なわれた。調査の対象は、東京郊外の多摩ニュータウンを中心とする集合住宅に住む世帯主とその配偶者及び、東京都内の杉並区を中心とする一般住宅に居住する世帯主とその配偶者である。「調査の結果、分析」の中で使われる「集合住宅」は前者をさし、「一般住宅」は後者をさす。この両地域に於て、800世帯を対象に、調査票を自宅に留置し、各自記入してもらい、配布数日後、訪問回収した。その結果、回収数585世帯、回収率73.1%となり、一世帯毎に、夫・妻それぞれ個別に記入してもらったため、回答者数は1,085名となった。

調査内容は、(1)1986年の新年に年賀状を出すか否か、(2)出す予定の年賀状の枚数やあて先、(3)年賀状の文面の形式や表記の方法、(4)年賀状についての考えや意見、などを問うものであり、年賀状を準備する時期の意識をとらえようとするものである。

「調査B」は、「受けとった年賀状の分析をとおして実態をとらえること」が目的であり、1986年1月中旬より、2月上旬にかけ、特定の個人に依頼して、世帯主と配偶者あてに届いた年賀状を分類してもらった。分類の項目は、(1)宛名はどのように書かれているか、(2)差出人の名前はどのように記されているか、(3)文面は縦書きか横書きか、(4)文面は印刷が主となっているか、(5)手書きが主となっているか、(6)版画、絵などが主となっているか、などであり、それらを差出人の年代(10代・20代・30代・40代・50代・60代以上)に分けて数量を記入してもらい、回収し、集計した。分類対象となった年賀はがきは、18,139枚であり、差出人の年代別でとらえると、10代-393枚、20代-1,403枚、30代-3,095枚、40代-4,503枚、50代-4,271枚、60代以上-3,600枚、企業体からのもの-874枚であった。

なお「調査A」は、三井・丸山が、「調査B」は、小林・遠藤が主として担当し、当研究会のメンバーと会員外の方々の協力を得て行なわれた。ご協力下さった方々、並びに、この調査を可能にして下さった(財)ベターホーム協会に厚く御礼申し上げますと共に、ここにその調査の結果・分析の一部をご報告する。又、調査Aの単純集計を調査の結果・分析のあとに付記しておく。

## 〔調査A〕

# 書き手の実態と意識

### 1. 年賀状を出すかどうか。何枚出すか。

まず、今度のお正月に年賀状を出すつもりかどうかを質問してみたが、夫、妻ともに90%以上が「出すつもり」と答えている。「出さない」と答えた7%の人に、その理由をたずねてみると、第1位は「喪中のため」で、過半数を占めている。「虚礼であるから」「時間的、経済的、労力的に無駄だから」という回答は、両方を合わせても20%で、全回答数から見ると1.6%に過ぎない。「虚礼だ」「偉大なる浪費だ」などの批判がありながらも、人々の生活の中に、しっかりと根を下ろしている慣習としての年賀状のすがたを示す数字である。次に差出し予定枚数を見ると、51～100枚が第1位で31.2%、101～150枚が第2位で23.5%、1～50枚が第3位で20.9%、151～200枚が第4位で9.4%となっている。この順位は、一般住宅・集合住宅ともに共通している。差出し人別の平均枚数は、表Ⅱのように夫73.9枚、妻28枚、夫婦連名18.3枚、家族連名14.2枚である。一般住宅と集合住宅の平均枚数をくらべると、一般住宅の方が多くなっているが、両者の平均年齢には、ほとんど差がないので、この枚数の差は生活スタイルの差、集合住宅に住んでいる人の方が、簡素な生活を営む傾向があるということを反映していると、考えていいのではないかと思われる。

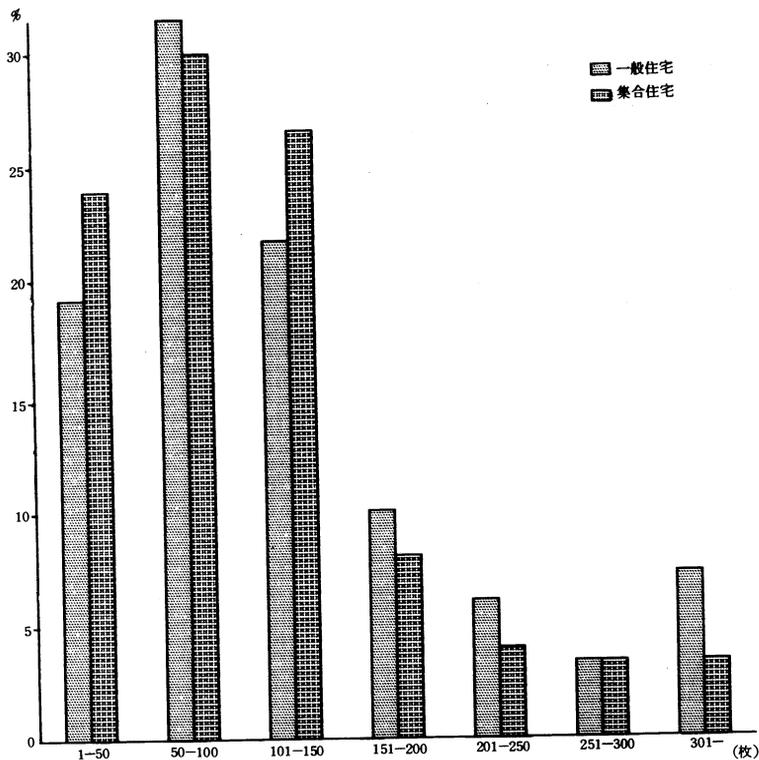
### 2. だれに何枚出すか。

次に、だれに何枚出すかを、見てみよう(Q4)。夫の場合はトップは「職業上の知人」で、約54%、半分以上を占めている。妻は、「知人・友人」がトップで、次いで「職業上の知人」「親類」の順になっている。これを枚数別のグループごとに見てみると、夫の場合は、50枚以下のグループだけが、「知人・友人」がトップで、他のグループとちがう傾向を示している。枚数を50枚以下にしぼった場合、第1位になるのは「友人・知人」であり、一般男性では、最も多い「職業上の知人」は、2位に後退するわけである。「職業上の知人」は、なんとも仕事上の必要に迫られて出すわけで、儀礼的要素が強いが、「友人・知

人」は儀礼とか義理とは無関係に「出したいから出す」という要素が強く、枚数を、しばった場合にも生き残るといことなのであろう。

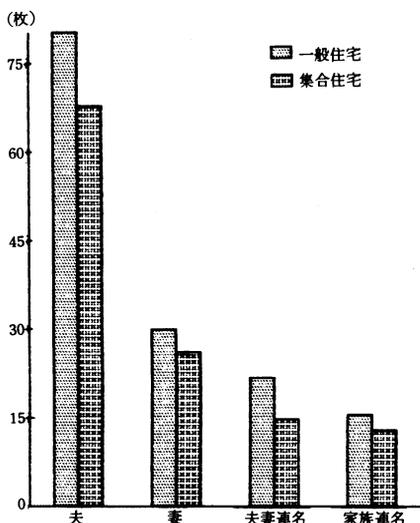
<表-I> 差出し枚数別の人数分布

枚数 差出人	枚 1-50	枚 51-100	枚 101-150	枚 151-200	枚 201-250	枚 251-300	枚 301-
一般住宅	19.5%	31.7%	22.0%	10.1%	6.1%	3.4%	7.3%
集合住宅	24.2	30.2	26.8	8.1	4.0	3.4	3.4
全 体	20.9	31.2	23.5	9.4	5.4	3.4	6.1



〈表-Ⅱ〉 差出人別枚数の平均

	夫	妻	夫婦連名	家族連名
一般住宅	80.1(枚)	29.9(枚)	21.7(枚)	15.5(枚)
集合住宅	67.7	26.1	14.8	12.9
平均	73.9	28.0	18.3	14.2



親類は、枚数の多いもの19枚(集合住宅の251~300枚のグループ)最も少ないもの4.7枚(一般住宅50枚以下のグループ)であるが、各グループとも5枚から7枚のあたりに集中しており、全体の枚数の増減にあまり関係なく一定の枚数を保っている核的存在であるといえる。これに対して、「職業上の知人」「友人」は全体の枚数の増加に比例して増える傾向があり、枚数を左右するのは「職業上の知人」「友人」にどれだけ出すかであることがわかる。

妻の場合、「職業上の知人」の占める割合は、どのグループにおいても低く、1枚から7枚ぐらいに過ぎない。一般住宅の妻の就業率は35%で、うちパートが34%を占めている。集合住宅の妻の場合は、就業率40%、うちパートが42%となっている。パートの割合が高いことから見ても、妻の職業生活の比重は、あまり高くないといえる。妻の年賀状で、「職業上の知人」に出される枚数が少ないのも、妻の職業の比重の軽さを反映していると言えるだろう。

### 3. たて書きか、横書きか。

次にQ5で、文面の形式が、たて書きか横書きかについて調べてみたが、一般住宅では夫の75%、妻の77%がたて書きと答えている。集合住宅では、夫・

妻ともに74%が、たて書きという数字がでている。横書きは、一般住宅では、夫8%、妻7%、集合住宅では、夫13%、妻11%となっており、集合住宅の方が横書きの比率が高くなっている。この傾向は、さきほどの枚数の場合とも共通しているが、年齢差というよりも、ライフスタイルの差、伝統を重んじるか、新しいものを取り入れる意欲が強いかの差と考えた方がよいだろう。年齢別に見ると、夫・妻ともに、最も横書きの比率が高いのは20代で、次いで30代、40代の順になっている。

#### 4. だれが書くか。

またQ6で、年賀状のあて名や印刷以外のことばを書く人はだれかということ質問してみたが、一般住宅では、夫が自分で書くのは68%で、26%、4分の1以上の人が妻に書いてもらっている。集合住宅の夫は73%が自分で書いており、妻に書いてもらっているのは、19%と、かなり低くなっている。ここにも年賀状代筆という内助の功を発揮する伝統的妻の姿と「自分のことは、自分で」という新しい生活スタイルを志向する団地族のすがたが、浮かび上がってくる。妻は、一般住宅、集合住宅ともに93%が自分で書いている。

#### 5. 文面はどうか。

ここで、文面について見ると(Q7、8、9)、夫の38%妻の22.6%が「印刷」、夫の34.2%妻の52.8%が「手書き」を予定している。総合すると、「手書き」43.8%、「印刷」30%、「自作の版画など」18.5%、「既製のスタンプ」6.2%ということになる。「手書き」がトップで、自作の版画などを入れると、手作りの、いわゆる心のこもった年賀状が、6割を超えることになり、「みんな、なかなかがんばってるな」と思わせる。しかし、この調査は、あくまでも予定を答えたものであり、実際に書かれた結果の調査ではない。相手方に届いた年賀状が、どうであったかを受け手の側から探る「調査B」においては、「印刷」が60.7%、「手書き」が18.5%「版画・自家製印刷」20.7%という結果になっている。この数字は、願望と現実とのズレの大きさを再認識させる数字である。「今年の年賀状こそ手書きで心をこめて書こう」と意気込んでみたものの、年

末のあわただしさとせわしさの中で、ついに印刷にさざるを得なかったという家庭も多いのではなからうか。

次に差出し枚数との関連を見てみよう。1～50枚のグループでは、総人数726名のうち372名、51%の人が「手書き」を予定している。51～100枚になると、「手書き」の割合は29%に減少し、「印刷」がトップで45%と半数近くに増加している。101～150枚のグループでも、やはり「印刷」がトップで45%、あとの半数は、「スタンプ」「自作の版画」「手書き」がだいたい同率になっている。151～200枚では、「印刷」が67%、201～250枚では、「印刷」73%、251枚を超えると、「印刷」の割合は80%以上になる。以上の結果をまとめてみると、50枚までは、半数の人が「手書き」にしようとするが、50枚を超えると「印刷」が増えて、「手書き」が減少する。以後、枚数が増えるにつれて、「印刷」の割合が増加し、251枚を超えると、「印刷」が80%以上を占めるようになるということになる。

一般住宅と集合住宅を分けて見てみると、一般住宅では、夫は「印刷を主とする」のがトップで妻は「手書き」がトップ、「印刷を主とする」のは2位となっている。一方、集合住宅では夫・妻ともに「手書き」がトップで、「印刷」は2位である。ここにも、一般住宅の伝統優位の姿勢が顔を出している。

版画・自家製印刷は、どのグループでも20%足らずで第3位、階層に関係なく一定の固定的地位を占めているといえる。

ところで、「印刷を主とする」人で、「印刷のみ」にする人の比率は、団地の妻を除いて、すべてのグループで第1位で半分以上を占めている。団地の妻は、「あいさつと近況報告を手書きにする」人が第1位である。ほかのグループでは、これは第2位になっている。もし仮に、印刷を儀礼度が最も高いものと考えて、Q7とQ8の結果から儀礼度の順位をつけると、儀礼度が最も高いのは一般住宅の夫、次いで集合住宅の夫、3位が一般住宅の妻となる。集合住宅の妻は、「手書き」が最も多く、「印刷」の人も半数以上の人が「あいさつと近況報告を手書き」しているというわけで、儀礼度は最も低いといえる。

## 6. 書き手の意識は

Q10では、年賀状についてどのように考えるか、いくつかの選択肢を用意し、3つずつ選んでもらった。第1位だったのは、夫・妻ともに③の「ふだんご無沙汰しているので、年賀状ぐらい書きたい」という意見で、夫・妻の平均で30.4%を占めた。次いで、2位は夫と妻で意見が分かれたが、夫の2位が①の「親交を末長く結び、深めるために重要である」で20.2%、妻は、②の「近況報告をかねた季節のあいさつとして必要である」で20.3%だった。3位は、2位の項目が、夫と妻で、それぞれ入れ替っているわけである。要するに、年賀状をやりとりする習慣を支持し、肯定する意見が上位1、2、3位を占めている。⑦の「非常に面倒で、負担に感じている」⑧の「時間的、労力的、経済的に無駄である」⑨の「虚礼だから廃止したほうがいい」⑩の「もらうのも書くのも負担でいやだ」という年賀状のやりとりに対して否定的な、あるいは積極的に廃止を主張する意見は、全部合わせても、わずか夫で5%、妻で3.6%に過ぎない。年賀状廃止論など、どこかへふっ飛んでしまう圧倒的な年賀状支持率である。

ここで、これだけ年賀状の習慣が支持される理由について考えてみると、まず「手軽さ」ということがあげられる。はがき1枚で、おたがいの縁がつけられるならば、色々な意味で安いものだというわけである。昭和25年に年賀特別郵便物として「封緘した書状（封筒に入れて封をした手紙）」が追加されたが、あまり利用者がなく、昭和37年には、この制度は廃止されてしまった。このことは、日本人の「はがき好き」を示しているが、はがきの手軽さが、今日の年賀状の隆盛をもたらしているともいえよう。

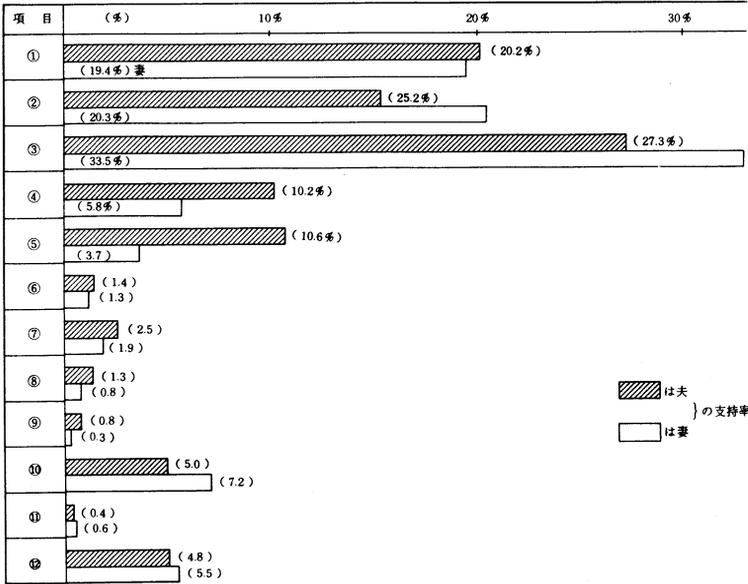
また、「ふだん、ご無沙汰しているので、年賀状ぐらい書きたい」という消極的的支持ともいえる意見が第1位を占めていることからわかる通り、忙しい現代にあって、とかくおろそかになりがちな人と人との交流を回復する手段として、「せめて年賀状でも」ということで差し出されているのではなかろうか。

〈表-Ⅲ〉 「年賀状をどう思うか。夫と妻別の表」

	夫	妻
① 親交を末長く結び、深めるために重要である。	226 (20.2)	256 (19.3)
② 近況報告をかねた季節のあいさつとして必要である。	173 (15.4)	268 (20.3)
③ ふだんど無沙汰しているので、年賀状ぐらい書きたい。	306 (27.3)	441 (33.5)
④ 習慣的なものとしてあまり深く考えていない。	114 (10.2)	77 ( 5.8)
⑤ 浮世の義理だから、儀礼的でもとにかく出している。	119 (10.6)	49 ( 3.7)
⑥ 本当は廃止したいのだが、その勇気がない。	16 ( 1.4)	17 ( 1.3)
⑦ 非常に面倒で負担に感じている。	28 ( 2.5)	26 ( 1.9)
⑧ 時間的・労力的・経済的に無駄である。	14 ( 1.3)	11 ( 0.8)
⑨ 虚礼だから廃止したほうがいい。	9 ( 0.8)	4 ( 0.3)
⑩ もらうのはうれしいが書くのは面倒である。	56 ( 5.0)	96 ( 7.2)
⑪ もらうのも書くのも負担でいやだ。	5 ( 0.4)	8 ( 0.6)
⑫ 書く相手によって気持ちがちがうので、いちがいに言えない。	54 ( 4.8)	73 ( 5.5)
合 計	1,120 (99.9)	1,318 (100.3)

〈数字は実数・( )内の数字は%〉

〈表-IV〉 「年賀状をどう思うか。夫と妻の比較」



### 7. 意識と行動の相関関係

次に、差出し枚数別の意識のちがいを見るために、夫を差出し枚数別のグループに分け、Q10の項目選択の状況を見たのが次の表である。

グループ分けは、夫の差出し枚数1～50枚をaグループ、51～100枚をbグループ、101～150枚をcグループ、151枚以上をdグループとした。

この表から言えることは、まず、差出し枚数が151枚以上と多いdグループで、最も年賀状に積極的な①の意見「親交を末長く結び、深めるために重要である」に対する支持率が高く、以下、c、b、aグループと差出し枚数に応じた順序になっていることである。これは当然と言えば当然のことであるが意識で年賀状を肯定している人は、行動面でも積極的に数多くの枚数を出しているということを示している。ところが①②③を合計した支持率になると、やはりdグループが最も高いが、101～150枚のcグループがbグループよりやや低くなっている点が注目される。その差は61.9%と66.1%と5%足らずであるが、②③の支持率は、cの方がbより低くなっているのである。bとcでは、年賀状に対する意識はあ

〈表V〉 夫の差出し枚数別のQ10の選択項目集計表

Q10の項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	計
1～50枚 a	48 (17.3)	34 (12.3)	63 (22.7)	38 (13.7)	27 (9.7)	6 (2.2)	12 (4.4)	8 (2.9)	3 (1.0)	20 (7.2)	3 (1.0)	15 (5.4)	277 (99.8)
51～100枚 b	66 (19.2)	63 (18.3)	98 (28.5)	30 (8.7)	38 (11.0)	4 (1.2)	7 (2.0)	3 (0.9)	2 (0.6)	17 (4.9)	0 (0)	16 (4.7)	344 (100)
101～150枚 c	56 (22.2)	35 (13.9)	65 (25.8)	26 (10.3)	33 (13.0)	4 (1.6)	5 (2.0)	1 (0.4)	4 (1.6)	8 (3.2)	1 (0.4)	14 (5.6)	252 (100)
151枚以上 d	58 (23.0)	42 (16.7)	82 (32.5)	21 (8.3)	23 (9.1)	2 (0.8)	4 (1.6)	2 (0.8)	0 (0)	11 (4.4)	1 (0.4)	9 (3.6)	252 (101.2)

表中上段の数字は実数、( )内は、右らんを100とした場合の率

〈表VI〉

差出し枚数による分類	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
a	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
b	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
c	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
d	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫

まり差がないが、cグループの人は実際の行動面では、101～150枚という少なくない枚数を出しているということになる。こころみに、⑤「浮世の義理だから、儀礼的でもとにかく出している」に対するcの支持率を見ると、13%で、4グループ中で第1位となっている。⑥の「本当は廃止したいのだが、その勇気がない」についてもaの2.2%に次いで1.6%第2位の支持率である。本当は廃止したいのだが、浮世の義理にしばられて、101～150枚という決して少なくない枚数をせっせと書き続けながら、本音とたて前のギャップに悩んでいるのがcグループということになるのであろうか。

一方、年賀状を否定あるいは支持しない意見である⑦⑧⑨⑩をまとめた支持率は、a、9.3% b、3.5%、c、4.4%、d、2.8%である。先の肯定的意見と同じように、cとbで枚数との相関において逆転現象が見られる。実際の差出し枚数ではbをはるかに上回るcが、意識においてはbほどにも年賀状を支持していないということ、やはり、示しているようである。

年賀状をはっきり肯定し、実際に150枚以上の年賀状を出すdグループ、年賀状に対し、かなり否定的な意見を持ち、行動面でも50枚以下というしばった枚数しか出さないaグループ、この両グループの間で、意識と行動が必ずしも一致せず、ゆれ動いているb、cグループという図式が見えてくる数字である。

## 8. 年賀状に求めるもの

最後に問題になるのは、年賀状の中味である。本調査の年賀状についての自由記入欄においても、年賀状の中味を問題にしたものが多かった。そのほとんどは、「お世話になった方（恩師とか先輩とか仕事の上でお世話になった方）や、親しい友人、知人で、平素お目にかかる機会がなかったり、少ない方に近況のお知らせを兼ねて、季節のご挨拶をするのに、年の初めは、又とない機会である。それには、印刷で大量生産するのではなく、1枚1枚心をこめて手書きすることが望ましい。賀状をいただいても、印刷のものよりも手書きのものの方が、どんなに心暖まる思いがするかしれない」という意見に代表される「年賀状手書き論」である。

「あくまでも義理や儀礼ではなく、心のこもったものを送りたいし、そういう

ものをももらった時に、はじめて年賀状の意義があると思う」

「画一的な年賀のあいさつだけでは、意味がないと思う。近況でも感想でも何でもよいから、その人自身のことば、もしくは版画など、とにかくその人自身の表現があってこそいただいた方でも嬉しいのではないかと思う」

「印刷ばかりで、宛名だけ自筆のものは、もらわない方が、まだましです」

などなど印刷や儀礼的なあいさつだけの年賀状に対する風当りは強く、心のこもった年賀状を切望する声は大きい。

こうした受け取る側の心情ともいべき「心のこもった年賀状待望論」に対し、現実には、先に見てきたように「印刷」の年賀状が圧倒的に多いわけであり、この「書き手」と「受け手」のギャップ、理想と現実のズレを埋めることが今後の課題のように思える。それは、「数」の面で肥大化した年賀状を「質」の面でもとらえ直し、人と人の論をつなぐ個性あふれるメッセージとして新しい生命を吹き込んでいくことではなからうか。

# 〔調査A〕 年賀状に関する質問文および集計結果

Q 1. こんどのお正月に年賀状をお出しになりますか。

- 夫 妻
- ① ( ) ( ) 出す。  
 ② ( ) ( ) 出さない。  
 ③ ( ) ( ) まだ、きめて  
 いない。

- Q 2. 年賀状を出さない理由はなんですか。
- 夫 妻
- ① ( ) ( ) 喪中だから。  
 ② ( ) ( ) 虚礼だと思うから。  
 ③ ( ) ( ) 時間的・経済的・労力的  
 に無駄だから。  
 ④ ( ) ( ) その他 \_\_\_\_\_。

Q 3 から Q 9 までは Q 1 で ① と答えた方のみお答えください。

( ) 内は%。以下すべて同じ。

	① 出す	② 出さない	③ 未定	無回答	計
夫	482 (92.5)	37 (7.1)	2 (0.4)	0 (0)	521 (100)
妻	513 (91.0)	47 (8.3)	4 (0.7)	0 (0)	564 (100)
計	995 (91.7)	84 (7.7)	6 (0.6)	0 (0)	1,085 (100)

↳ 理由

Q 1 回答者全員を100%とすると

	①	②	③	④	無回答	計
夫	20	1	7	8	1	37
妻	27	2	7	9	2	47
計	47 (55.0)	3 (3.6)	14 (16.7)	17 (20.2)	3 (3.6)	84 (100.1)
計	(4.3)	(0.3)	(1.3)	(1.6)	(0.3)	1,085 (100)

Q 3. 年賀状の差し出し枚数は約なん枚ですか。

夫 約 枚 妻 約 枚 夫婦連名で約 枚  
 家族連名で約 枚 合計 約 枚

	夫	妻	夫婦連名	家族連名
一般住宅	80.1枚	29.9枚	21.7枚	15.5枚
集合住宅	67.7	26.1	14.8	12.9
平均	73.9	28.0	18.3	14.2

	1～50枚	51～100枚	101～150枚	151～200枚	201～250枚	251～300枚	301～	計
一般住宅	64人 (19.5)	104人 (31.7)	72人 (22.0)	33人 (10.1)	20人 (6.1)	11人 (3.4)	24人 (7.3)	328人 (100)
集合住宅	36 (24.2)	45 (30.2)	40 (26.8)	12 (8.1)	6 (4.0)	5 (3.4)	5 (3.4)	149 (100)
計	100 (20.9)	149 (31.2)	112 (23.5)	45 (9.4)	26 (5.4)	16 (3.4)	29 (6.1)	477 (100)

Q 4. 年賀状のあて先についておうかがいします。

どちらに約なん枚お出しになりますか。

	親類	職業上つきあいのあ る人	その他の友人・知人	その他
夫	約 枚	約 枚	約 枚	約 枚
妻	約 枚	約 枚	約 枚	約 枚
夫婦連名	約 枚	約 枚	約 枚	約 枚
家族連名	約 枚	約 枚	約 枚	約 枚

	親 類	職 業 上	友人・知人	そ の 他	計
夫	3,416 (16.4)	20,963 (53.7)	10,836 (31.8)	751 (1.68)	35,966
妻	1,954 (11.7)	1,582 (2.18)	10,458 (24.8)	282 (9.5)	14,276
夫婦連名	4,265 (19.2)	1,463 (39.3)	3,618 (24.7)	270 (2.48)	9,616
家族連名	1,993 (18.8)	1,483 (34.6)	2,096 (28.6)	111 (1.41)	5,683
計	11,628	25,491	27,008	1,414	65,541

Q 5. 文面の形式についておたずねします。

夫 妻

- ① ( ) ( ) たて書き。  
 ② ( ) ( ) 横書き。  
 ③ ( ) ( ) どちらともいえない。

		た て	よ こ	どちらとも いえない	無回答	計
夫	一般住宅	249 (75.7)	26 (7.9)	49 (14.9)	5 (1.5)	329 (100)
	集合住宅	113 (73.9)	20 (13.1)	19 (12.4)	1 (0.6)	153 (100)
	計	362 (75.1)	46 (9.5)	68 (14.1)	6 (1.2)	482 (100)
妻	一般住宅	281 (77.2)	27 (7.4)	55 (15.1)	1 (0.3)	364 (100)
	集合住宅	110 (73.8)	17 (11.4)	22 (14.8)	0 (0)	149 (100)
	計	391 (76.2)	44 (8.6)	77 (15.0)	1 (0.2)	513 (100)
計	一般住宅	530 (76.5)	53 (7.6)	104 (15.0)	6 (0.8)	693 (100)
	集合住宅	223 (73.8)	37 (12.3)	41 (13.6)	1 (0.3)	302 (100)
	計	753 (75.7)	90 (9.0)	145 (14.6)	7 (0.1)	995 (100)

Q 6. 年賀状のあて名や印刷以外の言葉を書く方はどなたですか。

夫 妻

- ① ( ) ( ) 自分の分は自分で書く。  
 ② ( ) ( ) 配偶者に書いてもらう。  
 ③ ( ) ( ) 配偶者以外の家族に書いてもらう。  
 ④ ( ) ( ) 家族以外の人にたのむ。  
 ⑤ ( ) ( ) 重要なものだけ自分で書きあとは人にたのむ。  
 ⑥ ( ) ( ) その他 \_\_\_\_\_。

		①	②	③	④	⑤	⑥	無回答	計
夫	一般住宅	222 (67.4)	85 (25.8)	3 (0.9)	0 (0)	12 (3.6)	2 (0.6)	5 (1.5)	329 (100)
	集合住宅	111 (72.5)	29 (18.9)	0 (0)	0 (0)	6 (3.9)	2 (1.3)	5 (3.2)	153 (100)
	計	333 (69.1)	114 (23.7)	3 (0.6)	0 (0)	18 (3.7)	4 (0.8)	10 (2.0)	482 (100)
妻	一般住宅	339 (93.1)	13 (3.5)	1 (0.2)	0 (0)	3 (0.8)	3 (0.8)	5 (1.3)	364 (100)
	集合住宅	139 (93.3)	4 (2.6)	1 (0.6)	0 (0)	0 (0)	2 (1.3)	3 (2.0)	149 (100)
	計	478 (93.2)	17 (3.3)	2 (0.4)	0 (0)	3 (0.6)	5 (1.0)	8 (1.6)	513 (100)
合 計		811 (81.5)	131 (13.2)	5 (0.5)	0 (0)	21 (2.1)	9 (0.9)	18 (1.8)	995 (100)

Q 7. 年賀状の文面はどのようになさるおつもりですか。

夫 妻

- ① ( ) ( ) おもに印刷。  
 ② ( ) ( ) 既製のスタンプを押す。  
 ③ ( ) ( ) 自作の版画、自家製印刷（プリントごっこなど）を主とする。  
 ④ ( ) ( ) おもに手書き。

		①	②	③	④	無回答	計
夫	一般住宅	137 (41.6)	20 (6.0)	62 (18.8)	103 (31.3)	7 (2.1)	329 (100)
	集合住宅	46 (30.0)	12 (7.8)	30 (19.6)	62 (40.5)	3 (1.9)	153 (100)
	計	183 (38.0)	32 (6.6)	92 (19.0)	165 (34.2)	10 (2.0)	482 (100)
妻	一般住宅	89 (24.4)	22 (6.0)	63 (17.3)	187 (51.4)	3 (0.8)	364 (99.9)
	集合住宅	27 (18.1)	8 (5.3)	29 (19.5)	84 (56.4)	1 (0.6)	149 (99.9)
	計	116 (22.6)	30 (5.8)	92 (17.9)	271 (52.8)	4 (0.8)	513 (99.9)
合 計		299 (30.0)	62 (6.2)	184 (18.5)	436 (43.8)	14 (1.4)	995 (99.9)

Q 8. Q 7で①印刷、②スタンプとお答えになった方お答えください。

出す相手によってちがう場合は、一番枚数の多いものでお答えください。

夫 妻

- ① ( ) ( ) 印刷（スタンプ）のみにするつもりだ。

夫 妻

↓印刷内容は① ( ) ( ) 年賀のあいさつ。

- ② ( ) ( ) 近況報告。

- ③ ( ) ( ) 写真、自作の絵・イラスト・俳句など。

④ ( ) ( ) その他 \_\_\_\_\_。

② ( ) ( ) 年賀のあいさつのみ手書きでいれるつもりだ。

③ ( ) ( ) 年賀のあいさつと近況報告を手書きでいれるつもりだ。

④ ( ) ( ) 名前のみ手書きにするつもりだ。

		①印刷 (スタンプ)	②あいさつ のみ手書き	③あいさつ と近況	④名前のみ 手書き	無回答	計
夫	一般住宅	104 (66.2)	6 (3.8)	29 (18.5)	17 (10.8)	1 (0.6)	157 (100)
	集合住宅	32 (55.2)	3 (5.1)	15 (25.9)	6 (10.3)	2 (3.4)	58 (100)
計		136 (63.3)	9 (4.2)	44 (20.5)	23 (10.7)	3 (1.4)	215 (100)
妻	一般住宅	60 (54.1)	4 (3.6)	34 (30.6)	12 (10.8)	1 (0.9)	111 (100)
	集合住宅	14 (25.0)	0 (0)	18 (32.1)	3 (5.4)	0 (0)	56 (100)
計		74 (50.7)	4 (2.7)	52 (35.6)	15 (10.3)	1 (0.7)	146 (100)
合計		210 (58.2)	13 (3.6)	96 (26.6)	38 (10.5)	4 (1.1)	361 (100.5)

<印刷内容は>

		①年賀の あいさつ	②近況報告	③写真・イ ラストなど	④その他	無回答	計
夫	一般住宅	81	7	5	2	9	104
	集合住宅	26	0	1	4	1	32
計		107	7	6	6	10	136
妻	一般住宅	47	4	4	4	1	60
	集合住宅	11	0	1	2	0	14
計		58	4	5	6	1	74
合計		165	11	11	12	11	210

Q 9. Q 7で④手書きと答えた方、お答えください。

手でお書きになる内容はどのようになさるつもりですか。

夫 妻

- ① ( ) ( ) 年賀のあいさつのみ。  
 ② ( ) ( ) 年賀のあいさつと近況報告。  
 ③ ( ) ( ) その他いろいろと書く。

		①あいさつのみ	②あいさつ近況報告	③その他	無回答	計
夫	一般住宅	37	61	5	0	103
	集合住宅	25	31	5	1	62
計		62	92	10	1	165
妻	一般住宅	23	151	11	2	187
	集合住宅	5	71	7	1	84
計		28	222	18	3	271
合 計		90 (20.6)	314 (72.0)	28 (6.4)	4 (0.9)	436 (99.9)

Q 10. Q 10以下の質問には全員お答えください。

年賀状について、あなたはどのようにお考えですか。

あなたのお考えと一致するものに、三つまで○印◎印をおつけください。

三つなければ、一つ、二つでもけっこうです。

夫 妻

- ① ( ) ( ) 親交を未長く結び、深めるために重要である。  
 ② ( ) ( ) 近況報告をかねた季節のあいさつとして必要である。  
 ③ ( ) ( ) ふだんど無沙汰しているので、年賀状ぐらい書きたい。  
 ④ ( ) ( ) 習慣的なものとしてあまり深く考えていない。  
 ⑤ ( ) ( ) 浮世の義理だから、儀礼的でもとにかく出している。  
 ⑥ ( ) ( ) 本当は廃止したいのだが、その勇気がない。

- ⑦ ( ) ( ) 非常に面倒で負担に感じている。  
 ⑧ ( ) ( ) 時間的・労力的・経済的に無駄である。  
 ⑨ ( ) ( ) 虚礼だから廃止したほうがいい。  
 ⑩ ( ) ( ) もらうのはうれしいが書くのは面倒である。  
 ⑪ ( ) ( ) もらうのも書くのも負担でいやだ。  
 ⑫ ( ) ( ) 書く相手によって気持ちがちがうので、いちがいに言えない。

項目	夫	(%)	妻	(%)
①	226	(20.2)	256	(19.4)
②	173	(15.4)	268	(20.3)
③	306	(27.3)	441	(33.5)
④	114	(10.2)	77	(5.8)
⑤	119	(10.6)	49	(3.7)
⑥	16	(1.4)	17	(1.3)
⑦	28	(2.5)	26	(1.9)
⑧	14	(1.3)	11	(0.8)
⑨	9	(0.8)	4	(0.3)
⑩	56	(5.0)	96	(7.2)
⑪	5	(0.4)	8	(0.6)
⑫	54	(4.8)	73	(5.5)
計	1,120	(99.9)	1,318	(100.3)

複数回答

Q 11. どのような年賀状なら意味があるとお考えですか。その年賀状についてご自由にお書きください。

(自由記述の為省略)

Q 12. 年齢は次のどれにあてはまりますか。

- 夫 妻                      夫 妻                      夫 妻
- ① ( ) ( ) 10代      ② ( ) ( ) 20代      ③ ( ) ( ) 30代
- ④ ( ) ( ) 40代      ⑤ ( ) ( ) 50代      ⑥ ( ) ( ) 60代
- ⑦ ( ) ( ) 70代以上

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70～	無回答	計
夫	一般住宅	0 (0)	11 (3.1)	98 (27.3)	147 (40.9)	54 (15.0)	20 (5.6)	20 (5.6)	9 (2.5)	359 (100)
	集合住宅	1 (0.6)	8 (4.9)	44 (27.2)	55 (40.0)	34 (21.0)	12 (7.4)	3 (1.9)	5 (3.0)	162 (100)
	計	1 (0.2)	19 (3.6)	142 (27.3)	202 (38.8)	88 (16.9)	32 (6.1)	23 (4.4)	14 (2.7)	521 (100)
妻	一般住宅	1 (0.3)	21 (5.3)	158 (39.5)	135 (33.8)	34 (8.5)	31 (7.8)	14 (3.5)	6 (1.5)	400 (100)
	集合住宅	1 (0.6)	9 (5.5)	58 (35.4)	54 (32.9)	29 (17.7)	9 (5.4)	2 (1.2)	2 (1.2)	164 (100)
	計	2 (0.4)	30 (5.3)	216 (38.3)	189 (33.5)	63 (11.2)	40 (7.1)	16 (2.8)	8 (1.4)	564 (100)
合 計		3 (0.3)	49 (4.5)	358 (33.0)	391 (36.0)	151 (13.9)	72 (6.6)	39 (3.6)	22 (2.0)	1,085 (99.9)

Q 13. 職業は次のどれにあたりますか。

- 夫 妻
- ① ( ) ( ) 自営業・自由業
- ② ( ) ( ) 団体・会所の役員・管理職
- ③ ( ) ( ) 会社員・団体職員
- ④ ( ) ( ) 公務員
- ⑤ ( ) ( ) 教員
- ⑥ ( ) ( ) パートタイマー・臨時職員
- ⑦ ( ) ( ) 内職
- ⑧ ( ) ( ) 専業主婦
- ⑨ ( ) ( ) 学生
- ⑩ ( ) ( ) 無職
- ⑪ ( ) ( ) その他

	1	2	3	4	5	6	7
夫	103 (19.8)	61 (11.7)	268 (51.4)	21 (4.0)	14 (2.7)	4 (0.8)	0 (0)
	8	9	10	11	無回答		計
	0 (0)	2 (0.4)	33 (6.3)	5 (1.0)	10 (1.9)		521 (100)

	1	2	3	4	5	6	7
妻	52 (9.2)	6 (1.0)	36 (6.4)	2 (0.3)	9 (1.6)	74 (13.1)	12 (2.1)
	8	9	10	11	無回答		計
	323 (57.3)	1 (0.2)	28 (5.0)	11 (2.0)	10 (1.8)		564 (100)

Q 14. 最後に卒業された学校は下のどれにあたりますか。

(中退や在学中も含めてください)

夫 妻

- ① ( ) ( ) 中学校・旧制小学校。  
 ② ( ) ( ) 高校・旧制中(女)学校、専修学校。  
 ③ ( ) ( ) 高専・短大・大学・大学院・旧制大学・旧制高校  
 旧制高専。

	①	②	③	無回答	計
夫	26 (5.0)	134 (25.7)	351 (67.4)	10 (1.9)	521 (100)
妻	25 (4.4)	323 (57.3)	212 (37.6)	4 (0.7)	564 (100)
計	51 (4.7)	457 (42.1)	563 (51.9)	14 (1.3)	1,085 (100)

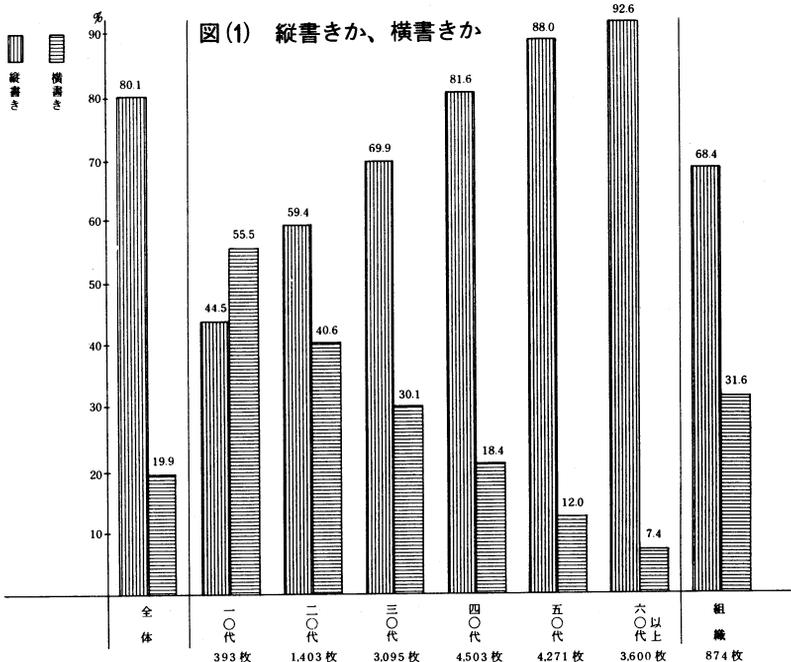
〔調査B〕

今年きた年賀状 その(1)

今年1986年1月に届けられた手賀状の実態を知るため、115世帯の協力をえて、宛名の書き方、差出し人の書き方、文面の書き方、あいさつ語の種類などについて調べた。別紙(1)のような項目に各家庭にきた年賀状の枚数を書きこんでもらう方法をとった。合計18,139枚について調査することができた。

(1) 縦書きか横書きか

公用文について昭和24年に「なるべく広い範囲にわたって左横書きとする」旨内閣通達が出されて以来、左からの横書き(以下「横書き」と記す)が普及し、現在の中学・高校の教科書でも国語以外は全て横書きになっている。こうした中で年賀状はどちらの書き方が選ばれているかを調べた。宛名の書き方には触れず、文面のあいさつ・差出人の住所・氏名などの書き方が縦か横かをみた。葉書を縦長に使うか横長に使っているかは問題にしていない。縦横混ぜたものは、中心的



な書き方の方をとった。差出人の年代別にみてそれぞれの年代での比率を出したのが図(1)である。

年代別にみると、10代で横書きが縦書きを上回っているほかは、どの年代でも縦書きの方が優勢である。しかも年代が上がるにつれその縦書きの比率が増している。全体の平均でも8対2で縦書きが圧倒的に多い。ただし、10代の人が出した年賀状が今回の調査では393枚しか集まっていない(全体の2.2%)ため、全体の比率で縦書きを押し上げる結果となっている。今回の調査は夫婦単位で行い夫婦として受けとった年賀状であるから10代からのものが少ないこともやむをえない。10代のものが多くなれば、全体の横書きの比率もより高くなることは予想される。

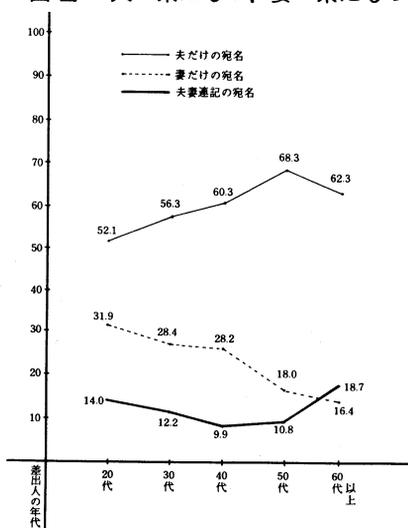
「組織」とは、会社とか団体の名で出されたり、その担当者名で出されていても、その個人との交渉がうすく、年代がわからない差出人からきた年賀状のことである。ここでのタテ・ヨコの比率は、約7対3で、年代別にみた30代の比率と近い数字を示している。企業・事業所などの単位で出されたものは、個人単位で出されたものよりヨコ書きの比率が高いともいえるのである。

## (2) 夫へ来たもの、妻へ来たもの

「夫は外に、妻は家に」いる夫婦が、現在では優勢であるから、年賀状を出すにしても受け取るにしても夫の方が妻より多いことは当然予想される。その夫と妻が受け取る年賀状の枚数の差が年代と関係があるのかないか、差出人を年代別にし、比べてみる。

それぞれの家庭に(勤務先も含め)配達されたものの宛名には①夫の名だけのもの、②妻だけのもの、③夫妻名並べたもの、④夫の名と御一同様・皆皆様のように家族全員にあてたものの

図(2) 夫へ来たもの、妻へ来たもの



4種類がある。この①②③の宛名で書いてきた人々を年代別に分けてその年代での①②③の比率を示したのが図(2)である。

どの年代でも夫あてのものが全体の半数以上を占めているが、その比率は年代と共に上がって50代で7割近くになっている。これに反して、妻あてのもの比率は年代が高くなるにつれ低くなっていく。20代と60代以上では、60代以上は20代の約半数にさがってしまっている。

また、夫妻名連記は20代で14%から30・40代と下がっているが、50代で低落傾向がとまり、60代では20代よりも上回るようになっている。

夫あてのものは年代とともに増えていたが60代では50代より減っていたのは、その分、60代で夫妻名連記のものが増えていたからである。夫の働きざかりの40代50代では夫あてのものが、どの年代よりも多く、夫妻名連記のものがまたどの年代よりも少なかったのが、60代をすぎると、若いころのように夫婦単位でのつきあいがもどってくるということらしい。あるいは、40代50代の会社人間としての仕事上のつきあいが去って、もとの夫婦単位でのつきあいが残った、ということかもしれない。

### (3) 差出人の名前の書き方

#### A 個人型と家族型

差出人の名前の書き方には、A、ひとりの名が書かれているもの、B、二人以上の名が書かれているもの、に大別できる。

Aでは、独身者の場合はもちろんひとりの名だけであるが、配偶者があっても、夫の名だけ書かれているもの、妻の名だけが書かれているものがある。

Bでは、組織名と数人の担当者連記という場合と、夫妻や家族名が連記されている場合がある。

ここでまず、個人名で書かれているか、夫妻・家族が連記されているか年代別に比べてみる。

表1.

	個人名			連名
	夫名	妻名	配偶者なし	夫妻・家族
20代	169	67	765	372
30代	1,171	465	270	1,141
40代	2,244	800	143	1,072
50代	2,569	489	106	885
60代以上	1,934	355	293	806

このうち、配偶者があって個人名にしているのと、配偶者があって連記しているのと、つまり前者を個人型、後者を家族型として比較してみると、次のようになる。

表2.

	個人型	家族型	計
20代	236 38.8%	372 61.2%	608 100%
30代	1,636 58.9	1,141 41.0	2,777 100
40代	3,044 74.0	1,072 26.0	4,116 100
50代	3,058 77.6	885 22.4	3,943 100
60代以上	2,289 74.0	806 26.0	3,095 100

20代では家族型が6割以上占めていたのが、年代が高くなるにつれ減ってゆき、30代で逆転し、50代になると、8対2の割合で個人型が圧倒的に多くなる。それが60代になるとまた少しではあるが家族型がもり返してくる。夫婦が結婚した当時は、年賀状も夫婦単位で出すことが多いのに、30代40代と働きざかりになると、夫が個人で出すことが多くなり、50代で会社人間のまっさかり

には夫婦単位という考えが薄れてしまう、しかし、夫が第一線を退くと再び夫が妻の方にもどってくる、というライフサイクルの表れであろう。

### B 夫婦対等型と夫主導型

家族型の中をさらにその名前の書き方で分けてみると、

a、夫婦名を並べたもの、b、家族名を並べたもの、と大別され、a では①夫の名前と妻の名前が同じ大きさで書かれたもの、②夫の名より妻の名が小さく書かれたもの、③夫の名を印刷した脇に妻の名を手書きで添えたもの、の三つの書き方がある。b でも、①全員が同じ大きさの字で書かれたもの、②夫と妻の名は大きくあとは小さい字で書かれている、③夫の名前だけ大きい字で書かれ、他は小さく書かれている、の三種類に分けられる。

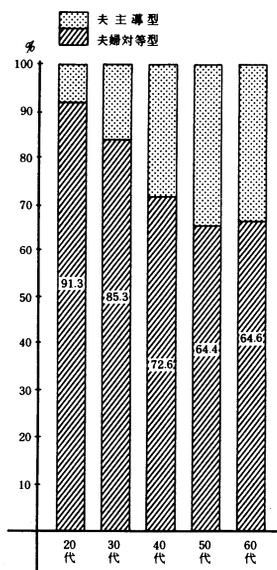
これらの書き方のうち、夫と妻の名前が同じ大きさの文字で書かれているのは、その差出人の夫妻の関係が対等なもの（年賀状の書き方において）、夫だけが妻や妻を含めた他の家族の名より一回り大きい字で書かれているのは、その家族の中では夫婦は対等でなく、夫主導型だとみることができる（あくまでも年賀状の書き方に限定してのことである）。

そこでこの夫婦の関係が差出人の年代とどう関係があるかをとりだしてみた。

これで見ると、どの年代でも、夫妻対等型が60%以上を占めているが、年代が高くなるにつれて対等型が減り、夫主導型が増えている。ただし、50代と60代とではわずかであるが、60代の方に対等型が多くなっている。有意差とはいえないかもしれないが、あるいは、年齢が高くなり、夫が第一線を退くあたりから夫婦の関係が若いころと同じように対等にもどるかけるといことなのかかもしれない。

全体で対等型が多いといっても、それ

図(3) 宛名の書き方



は家族名が連記されていたものの中での比率であって、それ以前に圧倒的多数が夫の個人名で出されていることを見落としてはいけない。あくまでも夫妻なり、家族なりが連記されていたものの中での比率であり、個人名で書かれている場合も含めた上での対等か、夫主導かではない。連記されていることだけですでに個人名だけのものより夫妻や家族が近い関係にあるとの推測もなりたつのである。

また、出す相手との関係も考えて、個人名で出したり、夫妻名で出したりと、出し分けている場合も考えられるが、それはここでは問わないで、とにかく、うけとった側からみて、どのような型の名前の書き方がされていたか、それは夫婦のどのような関係を反映しているのかを考えてみたのである。

20代で家族型が9割を占め、しかもその中で夫婦対等型が9割以上を占めているということからは、新しい夫婦関係が生まれつつあることがうかがわれる。

#### (4) 儀礼か「こころ」か

とどいた年賀状を、その書かれた文面から年賀状の心のこもり方を調べたのが以下の調査である。

書かれた、と言ってしまうと、それは直接手で書かれたものばかりではない。印刷されたもの、版画として彫られたもの、既製のハンコを押したものなどさまざまである。また、印刷でも、印刷屋に頼んだもの、小型の印刷機器で自分で印刷したもの、ワープロ機の印刷したものもある。しかも、印刷屋に頼んだものの中にも、一定のきまり文句だけを印刷したものと、自分で文面を考えてそれを印刷したものと分かれる。

このように、文面から年賀状を分析する際いくつかの型に分けて、どこかへ入れて処理しなければならない、その型のどこかへすんなり入るものと、いくつか分類した型のどれにも属さないもの、あるいはいくつかにまたがって入れた方がいいもの、など迷うものも出てくる。しかしそれは大勢に影響を及ぼすほど多くないからはっきりしたものだけで分類してみた。まず大きく印刷型と手書き型、版画型の三つに分けてみた、さらにそれぞれの型の中で印刷型では

①型通りのあいさつ・文章を印刷しただけ。

②印刷に手書きの文をそえる。

③写真・イラストなどを印刷。

④文面は印刷・名前は手書き。

の四つに分けた。この中で①はいわば無味乾燥な印刷のみに対し、②③④は何らかの点で思考と手が加えられていることになる。つまり、①のものが最も儀礼型で、それ以外は多かれ少なかれ心がこもったものである。

手書き型では主として

①年賀のあいさつ。

②あいさつと近況報告。

③手書きの文に印刷の名前かハンコ。

と三つに分けられる。①は文面に創意はないが、自らの手で書いたということで印刷型の①よりは心がこもっていると考えられる。

版画・自家製印刷などの中には

①自作の版画のみ。

②自作の版画に手書きの文。

③自家製印刷など。

④既製のスタンプのみ。

⑤既製のスタンプと手書き。

のようなものがある。版で押すのは同じでも自分で版画を作ると、既製のハンコを押すだけのとは年賀状にこめる思いの深さがずいぶん違う。

これらを心のこもり具合という点から仮に点数を与えてみる。版画型を5段階の点数をつけ、それに準じて印刷型を4段階、手書き型を3段階で点数を与えてみる。

印刷型

①型通り 1点

②印刷に手書き文 4点

③写真・イラスト印刷 3点

④文面印刷・名前手書き 2点

## 手書き型

- ①年賀のあいさつ 2点
- ②あいさつと近況報告 4点
- ③手書きの文印刷・ハンコの名前 3点

## 版画型

- ①自作版画のみ 3点
- ②自作版画に手書き文 5点
- ③自家製印刷など 4点
- ④既製スタンプのみ 1点
- ⑤既製スタンプと手書き 2点

これらの点数で年代別の差し出し人別にきわだった差があるかどうか調べてみた。

家庭を単位として考えているので、既婚者だけに限ってみることにする。

(3)でわけた「個人型」「家族型」にそれぞれの点数を与えたものを総計し平均を出したものが表3である。

表3.

	個人型	家族型
枚数	10,416	4,248
点数	28,965	12,962
平均	2.78	3.05

これで見ると、家族型つまり、差出し人の名前が夫妻や家族で連記されているものの方が「こころ」のこもったものが多いことがわかる。家族が連名で出されているということが、必ずしも家庭と家庭の交流がある関係を意味してはいない。つまり、年賀状を個人個人が作る手間を省いて、同一のものをまとめて作ってお

いてそれぞれが個人として出している場合もあるからである。しかし、たとえそうであっても、家族全員の名でたとえば夫だけの知人・友人に出すとしても、そのことが不都合でない、家族としてのあいさつを送ってさしつかえないと判断した上で出されているものである。

こうした家庭型であってみれば、家族それぞれの近況を報告したもの、新年の

抱負を述べたものなど、通りいっぺんのあいさつ以外のものが多くなり、ここで名づける「ころ」度が高くなるのも当然といえば当然ということになる。

次に「個人型」でも夫個人で出すものと、妻個人で出すものに「ころ」度の差があるかどうか調べてみる。(表4)

表4.

	夫個人	妻個人
枚数	8,239	2,177
「ころ」度 点数	21,280 点	7,685 点
平均点	2.58 点	3.53 点

これで見ると、夫個人の名で出されたものは、妻個人の名で出されたものより「ころ」度が低く、それだけ儀礼的・形式的なものが多いことがわかる。

このことは、夫は社会に出て、妻より、多くの人々との交流があるが、しかしその交流は、心を通わず性質のものでない場合が多いということであろう。妻個人

名で出す方が「ころ」がこもっているということは、妻個人で出す年賀状は相手をよく知っている。つまり実質的な交流のある人に向けられているということの表れでもある。

次に、この「ころ」度を年代別にみることにする。(表5)

表5.

	夫個人	妻個人
20代	3.09	3.72
30代	2.99	3.63
40代	2.82	3.60
50代	2.38	3.51
60代以上	2.29	3.19

夫個人の場合も妻個人の場合も、年齢が上がるにつれて「ころ」度は下がっていく。つまり20代の差出人によるものには「ころ」が強くこめられているが年齢が上がれば上がるほど「ころ」はうすれて、儀礼的・形式的になっているのである。

若い方がホンネのつきあいで、年をとるにつれてタメエのつきあいの度合いが

高くなるということであろう。

また、会社名、団体名で出された、個人の顔のみえない年賀状は、大量に作られ、印刷だけで手で書き添えたりすることはほとんどないから「ころ」度は低くなり、平均1.68点であった。

## 〔調査B〕

## 今年きた年賀状 その(2)

### (1) 年賀状のやりとりは同世代で……

この章では20代どうし1組92枚、30代5組の415枚、夫50代妻40代である1組の417枚と、7組の夫婦がそれぞれ今年受取った年賀状、合計924枚について調査その(1)よりはやや詳しい分析を試みる。この924枚はいずれも調査その(1)の対象となった18,139枚に含まれるものである。

枚数からわかる通り、40～50代夫婦はちょうど30代夫婦5組分の年賀状を受けとっている。30代5組についてはその中で最年長(夫35才、妻34才)の夫婦が142枚受取っている他は、およそ60～90枚といったところで、特に多いものも少ないものもない。ちなみに今年417枚受取っている40～50代夫婦も17年前、夫35才、妻30才のときに受取ったのは98枚だったということで、年齢の上昇、それに伴う社会的地位の向上やつきあいの幅の変化に従って、やりとりする年賀状の数も増えてきたといえる。もっともその増加のピークが50代あたりであって、受取人がさらに高齢に達し、職を退くなどしたあとは、やりとりする年賀状の数はまた減っていくということは考えられる。

次に、各世代の夫婦にあてられた年賀状の差出人の年代を見てみると、どの世代でも同世代からのものが最も多かった。さらに若い世代ほど同世代から受取る割合が高く、20代夫婦では63%、30代では34.9%、40～50代で25%前後という結果を得た。友人どうしのやりとりならば同世代を中心に行われるのかごく自然であり、年代差のあるものどうしのやりとりは親戚、恩師⇄生徒などの他は職業上の儀礼的な関係である可能性が高いだろう。とすれば、受取った枚数の年代差も考え合わせ、この結果は、同世代の友人どうしのつきあいから始まって年代が上がるにつれ徐々に異世代とのさまざまな職業上・社交上の関係が加わっていくという人間関係の変化を反映しているといっていよいと思う。

### (2) 30代は家族連名型……

ところで、この924枚のうち会社名、商店名など組織名で出された71枚を除

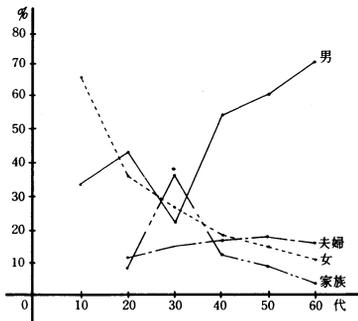
く853枚についてその差出人の年代別にどのような名前で見出されているか——男性名、女性名、夫婦連名、家族連名——の別に整理したのが表1および図1である。

(表1) 書き手の性別年代

	10～	20～	30～	40～	50～	60～	計
男	22	64	43	88	92	96	405
女	44	54	50	30	20	14	212
夫婦	0	17	28	28	28	20	121
家族	0	14	68	17	13	3	115
計	66	149	189	163	153	133	853

(組織71枚をのぞく)

(図1) 各年代の年賀状の書き手の割合



図から、男性名の年賀状の割合が世代を追って多くなり女性名のものが逆に少なくなっていくこと、夫婦連名のものはどの世代でもある一定数書かれ、増減が少ないこと、家族連名のものが30代に大きなピークを示していることなどがわかる。しかもこの30代のピークに逆比例するかのように男性名のものが落ちこみ、女性名のものよりも少なくなっているのも特徴的である。

30代で家族名連記が多いのは、独立していない幼い子を持ち、親自身が近況を語るにもまず子どものことからと——いわば子どもが家族の核となっている世代であるから当然でもあろうが、同時にこの世代は職業人にとっては社会の中堅として責任ある地位につき、その方面での交際が広がる時期ともいえる。全般的に年齢を追って男性名の年賀状の割合が増えていくのも、そのような男性の社会的地位への意識と無関係ではないだろう。そして、そう考えると、家族名連記が増えた分だけ男性名がすぽっと落ちるこの30代の現象は、この世代の特に男性の

職業意識、社会的地位への意識、家族意識の特異性としなければ説明がつかない。ちなみに調査Bでも30代の家族連名は確かに多く、夫名のもの1,171枚に匹敵する1,141枚という数が出ており、これは他の世代に比して多い。が、その結果、男姓名のものがぐっと落ちこむというような現象はない。

実はこの7組の夫婦のうち30代の1組をのぞく6組までが共働きで、妻も夫と同様個人的な職業上の交際も持ち、夫婦のあり方についても経済面、生活面等において対等な役割分担、発言力を持って家庭を築いてきている。そのような家庭における夫の職業の比重は、夫は仕事、妻は家庭という役割分業の家庭よりも軽いということは当然考えられる。またそのような夫婦の交際する人々にも同じような意識を持った人々が多いだろう。大学紛争などを経て、それまでの価値観を否定しようとする傾向のあった時代の風潮の尾を残し、ニューファミリーなどと呼ばれて家族意識が変化するとされた世代的な傾向に加えて、そのような夫婦独自（といっても、このような夫婦は決して少くはないと思われる。）の意識が、30代の年賀状差出人の特異な傾向にあらわれているといえるのではないか。

### (3) 若者は「手書き」「横書き」「イラスト入」で

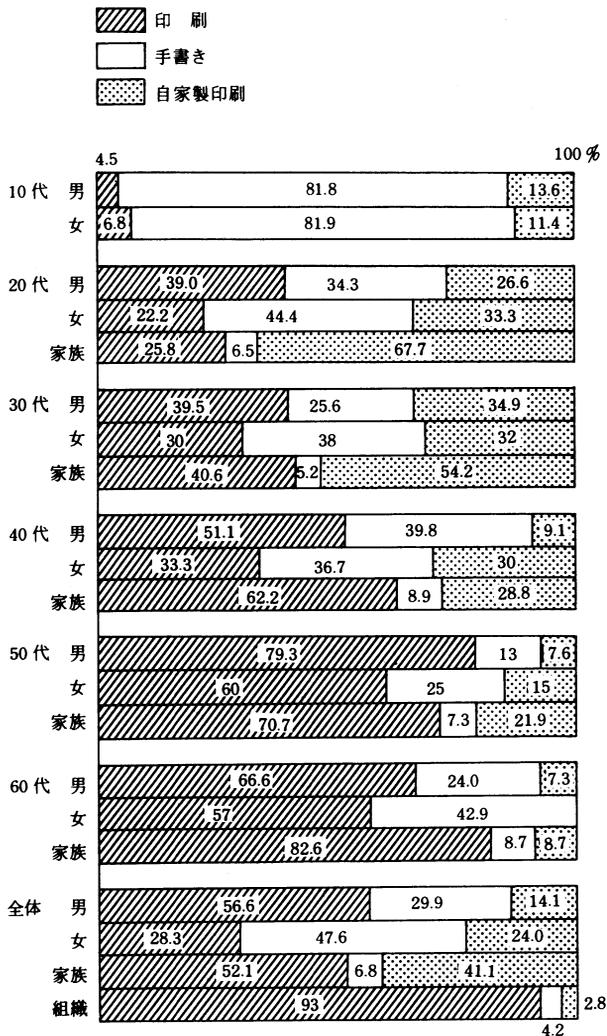
次ページ図2-1、2-2、3、4は、それぞれ、印刷の形態(2)、縦書か横書か(3)、イラスト等視覚的要素が含まれているか(4)、について差出人の年代別に整理したものである。

この三要素を見て気づくのは、「手書き」「横書き」「イラスト入」の現れ方の傾向が数量的な差はあれ、性別、世代的にはほぼ共通する一つの傾向を持っていることだ。即ちこれらはいずれも性別的には男性よりは女性に多く、年代的には若い世代に圧倒的で、差出人が高齢化するにつれ徐々に減少していく。ただ、「手書き」だけは50代から60代に移ってまた増加の傾向を見せている。これは前にも書いたように、退職するなどして交際範囲に変化を生じた——どちらかといえば減少の方向で——によって年賀状のやりとりの枚数が、特に職業上のつきあい、儀礼的な交際の部分で減っていく、その結果の一つの現れだろうと考えられる。

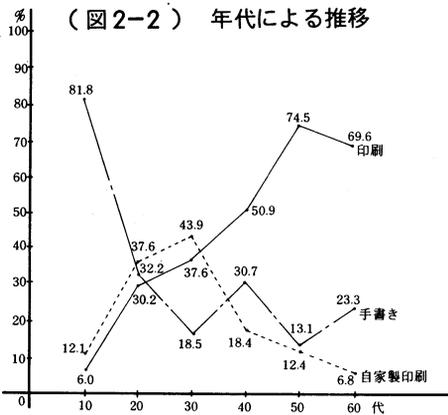
なお家族連名の年賀状の場合特徴的なのは印刷されたもの、視覚的要素を含むものの割合が高いということだ。この場合の印刷の中には自家製印刷（含、版画）

を含み、しかもその割合はかなり高い。特に20～30代の家族連名のものでは印刷屋に頼んだものを上回っている。同時にこの世代では視覚的要素を含むものが90～100%という高率で現れている。家族連名である場合に印刷が多いということは、出す枚数が多くなること、家族の誰にも通用する文面を考えなくてはならないことなどから十分にうなずけるところであるが、それを手軽に使える家庭用小型印刷器によって行うというところに、20～30代を中心とする家族連名年賀状に対する意識が現れているといえよう。

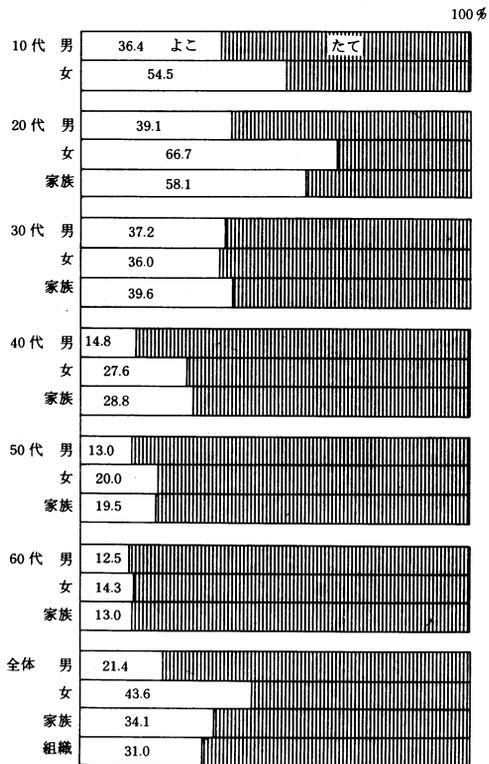
(図2-1) 年代、性別による印刷・手書き・自家製印刷の割合



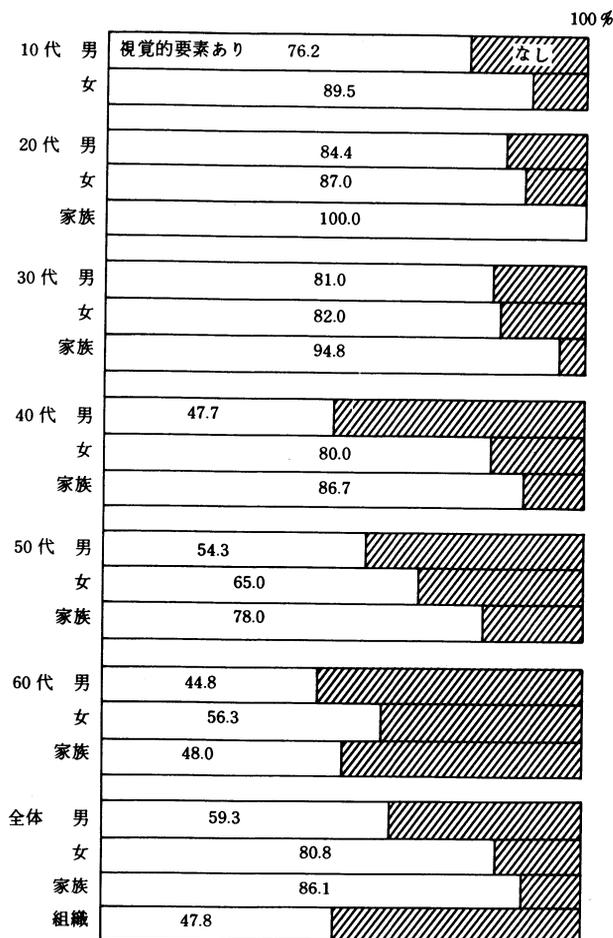
いわば紋付姿で決まり文句の口上を述べるのではなく、それぞれ個性的な平常着姿、自分のことばであり形式ばらず新年の挨拶をしようという姿勢である。このようなやり方が必ずしも万人の支持を得るものではない。それは、特に公的な生活部分の大きい年配の男性で印刷、たて書、視覚的要素なし——ついでにいえば挨拶は「謹賀新年」、添え書もない——というような年賀状の占める割合が増えていくことから容易に想像できる。が評価はともかく現実に20～30代の家族意識、年賀状への意



(図3) 横書き年賀状の割合



(図4) 年賀状における視覚的要素



※ 視覚的要素 版画、写真、イラスト  
多色刷（文字のみでも）飾り文字など

識には50代あたりで見られない、そのような傾向があるのは明らかな事実である。もっとも、今、家族連名、自家製印刷、イラストという年賀状を書いている20～30代が今後、20年、30年と同じようなタイプの年賀状を書き続けるのか、それともある年代で、現在の50代男性の書くようなタイプの年賀状にかわっていくのかは現時点では予測しにくい。

#### (4) 「挨拶語」について

年賀状は「謹賀新年」「あけましておめでとうございます」などの「挨拶語」で始まるのが普通である。これは「年賀状に対する意識の変化」が見られる若い世代でもかわりない。ただその意識の変化が、使われる「挨拶語」に反映するこ

とはあり得るだろう。ここではその実態を調べてみた。

まず924枚の年賀状の挨拶語を大きく次のように分類した。

1. 二字成語型（賀正、迎春、賀春など）
2. 四字成語型（謹賀新年、恭賀新年など）
3. おめでとう型
4. およろこび・お祝い・お祈り型（新春のお慶びを申し上げます、新年の御祝詞を申し上げます、など）
5. 外国語
6. その他
7. 挨拶語なし

なおこの分類については見坊豪紀氏のなされたもの（年賀状の分類・『辞書をつくる』玉川大学出版部 1976所収）を参考にした。

1～7までの性別、年代別によってどのように現れているかを表2、図5（1～4）に示した。

全体的には「おめでとう」型、四字型、二字型「およろこび・お祝い・お祈り」型の順で、この四型の割合がそれぞれ二桁に達し、四型を合わせると95.3%も占めている。挨拶語の代表的な型である。さらに細かく見ていくと、男性や組織を差出人とするものでは漢字成語、特に四字型が多いのに対して、女性の場合、これは8.5%にすぎず、かわって「おめでとう」型が優位を占めていることがわかる。また絶対数としては少ないが、外国語による挨拶も男性より女性に多い傾向にある。家族連名の年賀状の場合は、だいたい男性と女性の間隔的な傾向を示しているといっていよう。

また、差出人の年代的には10代では男女ともに圧倒的に多い「おめでとう」型が年代が上につれて減っていき、かわって四字型、二字型「およろこび——」型が増えていくことがわかる。「おめでとう」型は男性では早い時期から、一直線に減少していくが、女性・家族連名の減少はそれぞれ30代、40代までは比較的ゆるやかで、それ以後急に減っていく。これにかわって男性の場合は四字型が着実に伸びていくが、女性では60代以上に至るまで、世代による多少の増減はあっても四字型の伸びといえるものはない。女性の場合「おめでとう」型の減

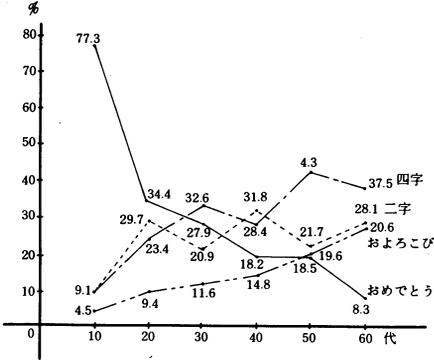
(表2) 型別・差出人別に見た挨拶語の割合

計	7 なし	6 その他(一字のもの など)	5 (外国語)	4 (およろこび)	3 (おめでとう)	2 (四字)	1 (二字)	挨拶語	
								枚	差 出 入
406	6 1.5	4 1.0	2 0.5	66 16.3	92 22.7	130 32.1	106 26.2	枚	男
213	1 0.5	4 1.9	13 6.1	26 12.3	105 49.5	18 8.5	46 21.7	枚	女
236	6 2.5	0 0	7 3.0	34 14.4	76 32.2	56 23.7	57 24.1	枚	家 族
71	0 0	0 0	3 4.2	8 11.3	16 22.5	35 49.2	9 12.7	枚	組 織
926	13	8	25	134	289	239	218	枚	計
100	1.4	0.9	2.7	14.5	31.3	25.9	23.6	%	

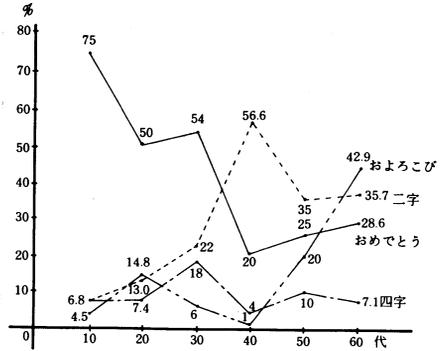
※合計が924枚を越えているのは、一枚に二つの挨拶語を用いたものを別々に数えたからである。但し割合算定の分母はそれぞれ年賀状の枚数(924枚)によった。

少を埋めているのは40代、50代では二字型、60代では「およろこび—」型である。ことに50～60代での「およろこび—」型の急増は他にないことで、この世代の女性の挨拶語に対する意識が示されているようで興味深い。この型はある意味ではもっとも丁寧な、儀礼的意味あいの濃い挨拶語といってよいのではないだろうか。二字型、四字型の漢字の字面のような固さもなく、「あけましておめでとうございます」のように子どもでも書けるような易しい慣用句というのでもなく、やや改まって衿を正すにふさわしい語として好まれているのでは

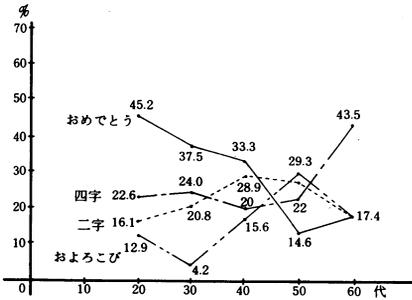
(図5) 挨拶語(型別)の年代による推移



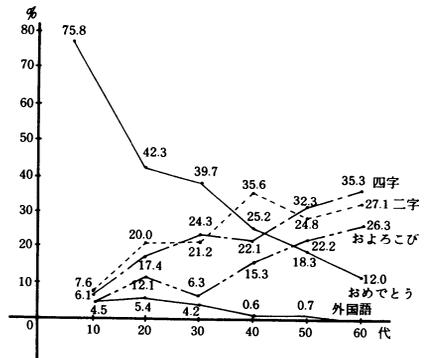
(5-1) 男性



(5-2) 女性



(5-3) 家族連名



(5-4) 全体

ないだろうか。

次に二字型であるが、前述のとおり40代の女性に好まれているという特徴があり、また女性の場合は、男性の四字型がそうであるように年代を追って徐々に増えていくのだが、男性や家族連名ではある一定量を保ち、多少の増減はあるが年代的に一つの方向に推移していくことはない。その意味では特に使い手を選ばない、もっとも穏健かつポピュラーな語といえるだろう。40代では男・女・家族連名いずれにも比較的良好に使われているが、この世代が家族連名自家製印刷年賀状の20～30代と、儀礼的な折目正しい50～60代にはさまれて両方の要素を併せ持つ中堅であることを考えると納得できる。

(図5-4)では外国語型出現の年代的な推移をあわせて表わしてあるが、絶対数は少ないものの、これも「おめでとう」型と同じく若い世代に使われることの多い語であるといえる。

全体の傾向として、若い世代に多用される語は、また女性に好まれる語でもあり、逆に高令世代と男性の傾向が一致することから挨拶語に対する意識は女性よりも男性の方がやや保守的なのではないかと考えられる。もちろん、これは社会的な位置の差などによって生ずる。慣例にとらわれる必要の有無の差——当然、若者や女性の方が必要が少ない——などによるのだといえよう。なお家族連名の年賀状の場合、印刷方法、視覚的要素などの形態面ではかなり著しい一傾向を示したが、挨拶語の場合は男性と女性の間際の傾向を示し、あえて特記すべき特徴は見られない。しいて言えば60代の四字型、50代のおめでとう型、30代の「およろこび——」型などを例外として、全体に増減の幅が小さく、どの世代でも四つの型が均衡して使われているといえよう。家族連名といっても挨拶語は家族のうちの誰かが代表して書くわけだから、その人の年代・性による特徴なども含まれた結果とも考えられる。そして、そう考えると、四字型の多い60代以上では、夫なり父なりが挨拶語を書き、30代あたりではむしろ家族のうちの女性が主導権を握って連名年賀状を書いているということも想像できる。

以上は型別に見てきたわけだが、実際にどのような挨拶語が使われているのか、多い順に並べてみる。( )内は各型の中で占める割合である。

① あけましておめでとうございます。 247例26.7%(85.5%)

② 謹賀新年	227例	24.5% (95.0%)
③ 賀正	85例	9.2% (39.0%)
④ 迎春	61例	6.6% (28.0%)
⑤ 頌春	33例	3.6% (15.1%)
⑥ 賀春	29例	3.1% (13.3%)
⑦ A Happy New Year	23例	2.5% (9.2.0%)
⑧ 新年おめでとうございます。	16例	1.7% (5.5%)

と80%近くが以上8つのうちいずれかの挨拶語を使っており、その中でも「あけましておめでとうございます」「謹賀新年」の2語で50%を越えているというわけで、年代差、性差はあるにしても、挨拶語における個性などというものは非常に乏しいといわざるを得ない。

なお年賀状の挨拶語については橋豊氏に詳しい言及がある。(『書簡体の研究』(続)第三章「年賀状の用語」1984、風間書房)氏は御自身の受取った年賀状205枚及び、茨城大附属中生徒の父母240名を対象としたアンケート調査によって、挨拶語は「謹賀新年」「あけましておめでとうございます」「謹んで新春のお慶びを申し上げます」「謹んで新年の御祝詞を申し上げます」「賀正」の順で多く用いられ、上位3語の合計が50%をこえるという結果を得ておられる。差出人、受取人の階層、年齢、性別などがかなり違うので、我々の調査での語の現れる順位とは必ずしも一致していないが、「謹賀新年」「あけましておめでとうございます」をはじめとするいくつかの挨拶語がもっぱら使われるという傾向については共通する。

## (5) 年号について

924枚に使われている年号(西暦、昭和、エトなど)を差出人の性別、年代別に整理した。(表3、図6)

数からいえば、「昭和」が全体の半数近くを占めて、圧倒的な優位に立っている。61年目を迎えて「昭和」は健在なりというところか。ただし女性では「西暦」が「昭和」をこえ、また10~20代の若年層にも「西暦」がかなり使われている。また若い世代を中心に全く年号を使わないものも1/4近く存

在する。年号は年賀状の必須条件ではないようである。家族連名や組織からのものには年号のないものは比較は少ないが、これは印刷による年賀状が大部分を占めていることによるのだろう。

ところで「昭和」と「西暦」の性別・年代による現れ方は、ちょうど挨拶語における「謹賀新年（四字型）」と「あけましておめでとうございます（おめでとう型）の現れ方とおおむね一致している。但し、家族連名の場合は挨拶語では男性と女性の現れ方の中間的な様相を示していたのに対し、年号の場合には男性よりもさらに多く「昭和」を使うということで少々違った傾向を示しているのが興味深い。

(表3) 差出人による年号の割合

計	4 なし	3 エ ト	2 昭 和	1 西 暦	年号	
					枚	差出人
405	118 29.1	10 2.5	208 51.4	69 17.0	枚	男
212	58 27.4	7 3.3	66 31.2	81 38.2	枚	女
236	40 16.9	2 0.8	124 52.5	70 29.7	枚	家族
71	10 14.1	0 0	46 64.8	15 21.1	枚	組織
924	226	19	444	235	枚	計
100	24.5	2.1	48.1	25.4	%	

(図6) 年代による推移

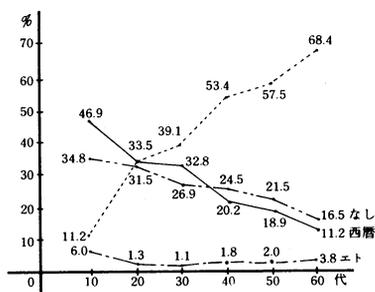


表4は、挨拶語の型別に年号がどのように現れているかを示したものであるが、ここでも「おめでとう」型が西暦と、四字型が昭和と結びつく傾向がはっきりと現れている。また二字型に年号のないものが多いということもいえる。もっともこれらは、71.4%が西暦である外国語の挨拶とはちがって、挨拶語と年号の間に相関的な関係があ

(表4) 挨拶語と年号

計	その他	外国語型	祝い・お祈り型 およろこび・お	四字型	二字型	おめでどう型	挨拶語		年号	
							枚	%	西暦	昭和
157	6	15	4	27	25	80	枚		西	暦
30.8	46.2	71.4	6.9	26.2	22.3	39.6	%			
193	2	2	38	53	40	58	枚		昭	和
37.9	7.7	9.5	65.5	51.5	35.7	28.7	%			
13	0	1	4	2	2	4	枚		エ	ト
2.6	0	4.8	6.9	1.9	1.8	2.0	%			
146	5	3	12	21	45	60	枚		な	し
28.7	38.5	14.3	20.6	20.4	40.2	29.7	%			
509	13	21	58	103	112	202	枚		計	
100	100	100	100	100	100	100	%			

※但し調査したのは、受取人20〜30代の509枚についてのみである。

るのではなく、あくまでも書き手の年賀状への意識が、挨拶語、年号にそれぞれ現れていて、それが挨拶語と年号の使用において一致したということだと考える。圧倒的な「昭和」優位の中で、我々の周辺には「元号」に反対する主張が常に存する。「元号」は使わぬという立場、もしくはそれほど意識はしないがあまり「元号」にこだわらず、むしろ西暦を使うことが多いという立場と、「おめでどう」を使う意識とがちょうど一致したということである。なお、「およろこび」型でも65.5%と圧倒的に「昭和」が使われているが、これについても、この伝統的な長い挨拶語に西暦よりは「昭和」が似合うということはあるにしても、やはり第一には、それぞれが高齢者によって使われる傾向の強い挨拶語であり年号であることから、ともに使われることが多くなったと考えるべきだろう。

(6) 添え書について

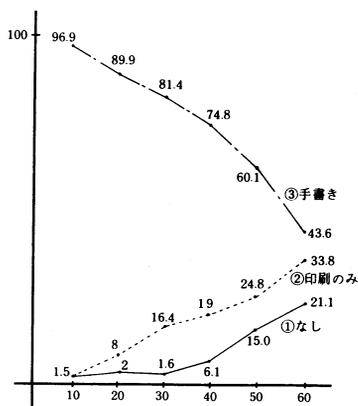
添え書については大きく次のように3分類し、性別、年代別にそれぞれの現れ方を見た。(表5、図7)

- ① 全く添え書はなく、手書き、印刷にかかわらず挨拶語(と年号)のみのもの。
- ② 挨拶語に加えて印刷の添え書があるもの。
- ③ 手書き、または印刷の挨拶語や印刷の添え書に加えて手書きの添え書があるもの。

(表5) 差出人の性別と添え書

計	③手書き	②印刷のみ	①添え書なし	添え書	
				枚	差出人
405	264	97	44	枚	男
100	65.2	24.0	10.9	%	
212	199	11	2	枚	女
100	93.9	5.0	0.9	%	
236	189	25	22	枚	家族
100	80.1	10.5	9.3	%	
853	652	133	68	枚	計
100	76.4	15.6	8.0	%	

(図7) 添え書の年代別推移



全体的には何らかの手書きの添え書のあるものが圧倒的に多く76.4%を占める。ことに女性では93.9%という高率で手書きの添え書が行われている。ただこれについても年代が上がるにつれて徐々に減ってきて、かわりに印刷のみの添え書や、添え書の全くないものが増えていく。挨拶語(と年号)以外には全く何もない、いわば儀礼的存在証明とでもいうような①型は全体としては8%にすぎないが、50代から男性を中心に増加して2桁の%を示す。

このようなものは論外として、添え書のあるものについてだけ考えてみるとしても、印刷のみか、手書きを加えるかという間には相当に大きな意識の差があるだろう。印刷の添え書にもずいぶん凝った盛り沢山の内容をもつ楽しいものもあるが、いかに詳しく長くともこれは特定の個人でなく万人に向けたものである。それに対して手書きで添え書をする場合には、たとえ一言書くにしても相手を思いうかべ、その相手に向けて書くのが普通である。このとき年賀状は単なる儀礼的な存在証明や万人向けに声高に叫ぶ挨拶から、私信へと変貌する。そう考えると、以上の結果からは女性や若者たちが儀礼としてでなく、私信として年賀状を書いている姿がうかんでくる。

## (7) ま と め

以上から年賀状には2つの大きなタイプがあり、それぞれの書き手もくっきりと分かれる、ということが明らかになった。即ち、1つは既製印刷、縦書、イラストなし、挨拶語は「謹賀新年」、年号は「昭和」、添え書についてもないか、印刷によるものだけであることが、他のタイプよりは多いというもので、書き手は高齢者や男性である。いま1つはこれと正反対で手書きか自家製印刷、横書きも比較的多く、イラスト等視覚的な要素があり、「おめでとウ」型の挨拶、年号は西暦、添え書を自筆で書くというタイプで、これは若い世代や女性に多い。前者はどちらかといえば旧来の保守的なタイプ、後者は新しい形の年賀状だろう。もちろんこれらの要素は性や年齢の組合せによってさまざまな現れ方をするのだが、それでもその両極に上記の2タイプがあることははっきりしている。

例えば、30代の家族連名の年賀状についていえば、印刷・形式・イラスト等の部分では典型的な後者のタイプで、それまでの年賀状のあり方に、ここから変化が現れたと言ってもいいくらいだが、そこに使われる挨拶語や年号は存外保守的な匂いを残している。また女性の場合は男性に比べても、高年齢の世代と若い世代の落差がさまざまな面で大きいように思われる。それらは当然、単に年賀状の書き方の差というだけでなく、社会生活への意識や、家族観、「儀礼」に対する意識を反映したものといはなくてはならない。即ち、従来男のつきあい、大人のつきあいの中では、何にもまして意義あることとされた職業上の儀礼、折目正

しい口上などが特に若い層や女性では重く見られなくなり、かわりに友人どうし、家族ぐるみの気のおけないつきあいや、個性的であり互いにリラックスしあえるようなことばのやりとりが大切にされるようになった、そんな人間関係の変化がここには現れているとってよい。年賀状も誰にでも同じように口上を述べる儀礼的な挨拶状としてより、私信の一つとしての性格が付加されるようになったのである。

新しい年賀状の傾向は今の20～30代が高齢化するに従って全体に広がっていくのか、それともある世代に達すると保守化し、高年齢世代・男性と若い世代・女性の二極分化は今後も続いていくのか、あるいは、さらにちがった様相が現れてくるのか、興味深く見守っていききたいところである。

差出し人	代	たて書き	よこ書き
		枚	枚

① 差出し人のお名前はどのように書かれていますか。	② 宛名はどう書かれていますか。				計	③ 文面はどのように書かれて		
	夫の名だけ	妻の名だけ	夫並べて 妻の名を	夫一同様など		印刷を主とするもの		
						型通りの あいさつ 印刷のみ	近況報告 その他 いろいろ	印刷に 手書きの文 をそえる
ひとりの名前だけ書かれています	配偶者あり	夫の名だけ						
		妻の名だけ						
	配偶者なし							
	組織名							
	組織名と担当者名							
二人以上の名前が連ねられている。	夫妻名連記	夫と妻と同一 夫は大きき 妻は小さき						
		夫は手書き 妻の名は印刷						
	家族員連記	全員の字で 夫は大きき 妻は小さき						
夫は大きき 妻は小さき								

